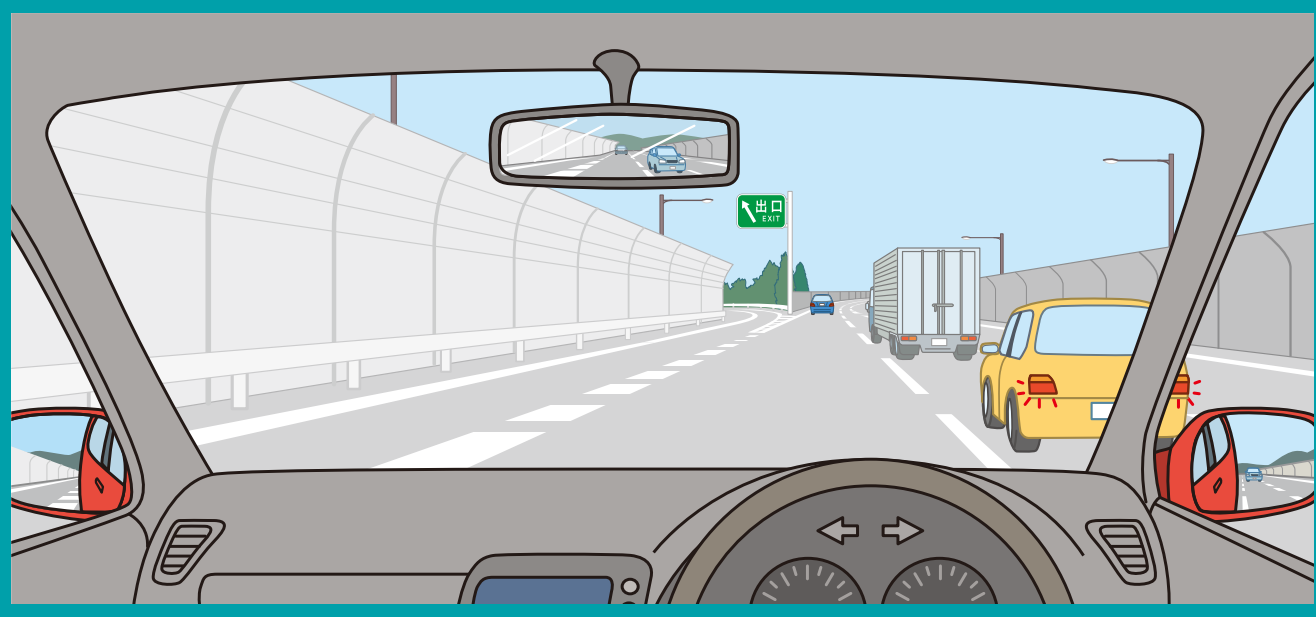
KYT 危険予測トレーニング

第91回　高速道路の出口を通過する時（四輪車編）

交通事故を回避するためには、路上で出会うさまざまな危険を予測することが大切です。このコーナーでは危険感受性を高めるための題材を提供します。今回は四輪車のドライバーに、高速道路の出口を通過する時の危険について考えてもらうためのKYTです。

あなたは高速道路の走行車線を走っています。
出口にさしかかりましたが、そのまま直進しようと思います。
安全に走行するためには、
どのようなことを予測する必要がありますか？



活用方法

1. 少人数のグループをつくります。
2.「交通場面のイラスト」を見ながら、意見を出し合います。
3. その後、「解答・解説※」を参考にして、どんなことに気をつければ良いか再び話し合ってください。

※「解答・解説」と「交通場面のイラスト（カラー・A4版）」は下記SJホームページでご覧いただけます。またPDFファイルもダウンロード（無料）できます。

ホンダ　SJ　検索

【使用上の注意】
●営利目的での利用はおやめください。
●内容の無断転載、無断改変、一部抜粋しての利用はおやめください。
●その他、使用に関するご質問はお問い合わせください。

本田技研工業（株）安全運転普及本部
TEL：03(5412)1736　E-mail:sj-mail@spirit.honda.co.jp

© 本田技研工業（株）

SJ クイズ 高齢運転者編 ?

Q1 2023年の75歳以上の高齢運転者（第1当事者※・原付以上）による交通死亡事故件数は10年前（2013年）に比べ、どのような状況になっているでしょう？

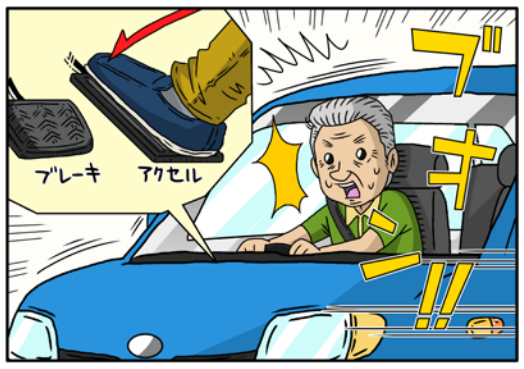
①増加している　②減少している　※交通事故の当事者のうち、過失が最も重い者または過失が同程度の場合は被害が最も軽い者。

Q2 2023年の自動車運転者（第1当事者・乗用車、貨物車、特殊車）による年齢層別死亡事故を人的要因別にみると、75歳以上で最も多いのは次のうちどれでしょう？

①操作不適　②安全不確認　③内在的前方不注意（漫然運転等）

Q3 アクセルとブレーキの踏み間違い事故件数（2018～2020年・第1当事者・軽乗用車、普通乗用車）を年齢層別にみると、最も多いのは75歳以上ですが、その割合は何%でしょう？

①約20%　②約40%　③約60%



「解答」はP7下、「解説」は
下記SJホームページでご覧いただけます。
https://www.honda.co.jp/safetyinfo/sj/

Safety Japan Action 2024 秋

～ 高齢歩行者をまもれ！ ～

Hondaでは、秋の全国交通安全運動をリードすべく「Safety Japan Action（セーフティジャパンアクション）2024 秋」を9月16日～10月4日、Hondaの二輪・四輪の販売店や関連会社、各事業所を発信拠点とし、Hondaグループ一体となって、すべての交通参加者へ向けて展開してまいります。この秋は“高齢歩行者をまもれ！”をテーマに、「『だろう運転』から『かもしれない運転』へ」に重点を置いて啓発しています。スペシャルサイトを開設し、抽選で当たるプレゼントも用意しています。下のQRコードからアクセスしてください。多くの皆さまのご参加をお待ちしています。

スペシャルサイトで高齢歩行者を守るための啓発動画を発信

期間中は交通安全ぬりえキャンペーンを実施

二輪・四輪販売会社で配布している安全運転情報誌「Think Safety」

スペシャルサイトへアクセス

SJ 編集部だより

～交通事故死者ゼロをめざして～

高齢ドライバーによる交通事故がセンセーショナルに報道されるたび、運転を継続している高齢者には社会から厳しい目が向けられてしまう。運転免許の返納を促進すれば、高齢ドライバーの事故はなくなるかもしれない。しかし、公共交通機関が十分に整備されていない地域で暮らす高齢者の中には運転ができなくなると、生活そのものが成り立たなくなる人もいる。さらに、運転をやめると、要介護状態や認知症発症のリスクが高まるという報告もある。

今号の巻頭（P1～2）で紹介したHondaの「健康起因事故低減技術の探索」プロジェクトの「運転を通じてドライバーに健康になってもらう」という発想は、これまでの高齢ドライバー対策に一石を投じるものといえる。これを実現する技術やサービスが社会実装されれば、「運転するからアクティブになり、アクティブだから健康になる、そして健康だから安全運転ができる」という好循環を生むことが期待できる。また、しらとりハワイアンデイ（P4）のように、介護の現場でも高齢者の体力づくりとあわせて運転能力の維持をめざす動きが出てきている。

このような“健康”と“運転”を関連づけた取り組みが、高齢ドライバーの事故防止において重要性を増していくのではないだろうか。引き続き、高齢ドライバーの健康と運転能力の維持に向けた研究や活動に注目していきたい。